
もう1つの世界

咲山空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう1つの世界

【Nコード】

N1687Z

【作者名】

咲山空

【あらすじ】

私達が住んでいる世界の裏側には似ているけれど違う世界があった。日々つまらない毎日を過ごしていた主人公の千尋はその世界に連れてこられてしまう。

ある日の2限目(前書き)

気まぐれに更新していきたいと思います。

ある日の2限目

いつもと変わらない月曜日。これからまた一週間が始まると思うと
たまらなく憂鬱になる。

時々、今週はなんとなくイケると思う時がある。それがまさに今日
だった。だが、2限目辺りからそんな思いもどこへやら。いつもと
変わらずつまらないじゃないか。何がイケるだ。

「ひーまーだー」

「何だ？牧野。そんな暇なお前に特別プリントを用意してやるうか。」

「いやだー」

また授業中に大声で叫んでしまった。ああ、みんなの視線が痛い。
いつものことだけど。

私、牧野千尋は地元でもなかなか有名な進学校に通っている高校2
年生だ。その中で私の成績はまさに真ん中。さっきの様に思ってる
事を時場合も関係なく大声に出してしまうことがしばしば、いや、
かなりある。

そして進学校であるために生徒はかなり真面目だ。私が可笑しな行
動に出るとすぐに痛い目で睨んでくる。

対称的に先生の方はそれほどお堅い人たちは多くない。現に今の時
間の現代社会の先生は特にだ。酒井雅人先生といって名前はかつこ
いい感じだが50代のおじさん先生だ。毎回授業の度にギャグを言
っている。最初のうちは私と私の親友の知佳だけは笑っていた。だ
が今はつまらなくなってスルーしている。勿論クラスのみんなは無
反応だ。それにも関わらず先生は今日もオヤジギャグを飛ばしてい
る。

キンコンカンコーン

やっと授業が終わった。

「ちょっと千尋。また授業中に大声出してー。」

「だってつい声が出ちゃうんだもん。」

この黒髪ロングの美人さんが親友の知佳。1年の時からの付き合いで、この張り詰めた学校で唯一気の合う友達だ。

「ほんと、千尋って面白いよね。」

「知佳もやってみれば？」

「授業中に叫べと？無理だね。私、クールビューティーだもん。」

「自分で言う？あんたの方が面白いわ。」

キンコンカンコーン

「こんな会話をしていると、あっという間に次の授業になった。あーあ、休み時間って短い。次の時間は、、、英語か。」

異世界へ

英語は、今年先生になったばかりの女の先生だ。授業は淡々と進んでまともかと思いきや、たまに自分の個人的な話に脱線する。

「、、、これで第3段落は終了です。わからないところはありますか？あ、そうそう、この間愛猫のミケが」
「ほら、また始まった。愛猫ミケ物語。つまらないから、てか誰も聞いてないし。みんな自習に入ってるよ、先生。」

そんなつまらないながらに心の中で先生にツツコミを入れたりなんかをしている毎日だ。ふと時計を見るともうすぐ11時。まだ授業開始から10分もたっていないのか。

そうため息をついて何気なくガラス越しに廊下を眺めると、足音はしていないのに影の行列が歩いていく。

「わっ」

思わず小さく声をあげた。その影の1つがこちらに向かって話しかけてきた。

「迎えに来た」

なに、あの世？ただ授業受けてるだけなのに私、死んでしまったの？斜め前にいる知佳に話しかけてみるけれどなぜか聞こえていないみたい。

ガラガラ

後ろのドアが開いて黒い影が教室に入ってきた。

「ちよと知佳、大変だよ！反応して！」

戸惑い、頭がパニックになっていると私は黒い影に腕を掴まれ、そのまま廊下に連れ出された。

廊下に出るといつもと変わらず教室では授業をしている。私がいなくなってるのに誰も気づいていないみたいだ。何が起きてるの？
廊下は霧がかかったような青黒いような明らかにいつもと違う、いや、外の風景もなにか違う。

そう思ったところでわたしは意識が朦朧としてきた。

目覚めた後の異変（前書き）

地の文と主人公が考えていることの文を行の間隔で分けてみました。どうですかね？アドバイス貰えると嬉しいです。

目覚めた後の異変

次に目を覚ましたのは私の家によく似た場所だった。

いや、私の家？このぐちゃぐちゃに洋服や教科書が散らばっている部屋は確かに私の部屋で今朝、出た時のままだ。

どうして？私はいつものように学校に行って普通に授業を受けてるそう。黒い影が教室に入ってきて、みんなが私の話を無視したんだ！！全く知佳め！！あとで何かおごらせなくちゃ。

じゃなくて、黒い影にさらわれて私が廊下に出たらなぜか辺りが霧がかかったような景色になっていたんだ。それからわたしは意識を失った。

夢？そうか、夢か。そう言えば朝から気分が悪かったような気がする（実際は今日はいけると思っていたんだっただけ）。

そして早退して誰かが送ってくれたと。なるほど、そういうことか。

カバンからお茶を取り出して一息。

ん？待てよ？この霧はなんだ？家の中なのに。

私は部屋を出てみた。そして階段を降りていてふと思った。

あ、上がってる？！

降りているつもりがなぜか上っていた。

私の部屋は2階なのに。そんなめちゃくちゃなことって有り？夢なら有りなのか？私、まだ夢を見ているのかも。

とりあえずと思い、階段を上りきってみた。

やはり私の家の1階に間違いない。間取りが同じだし。

ドアを開けてリビングに出て、周りを見渡してみた。するとすぐに時計と本が目についた。

何か不自然だ。、、、逆？

そうか、時計の秒針は左回りだし、この本、確か題名は『黒城』のはずなのに『白城』ってなっている。って、どうでもいいことなんだけど。

どういうこと？意味が逆さまじゃない。

それに窓から見えるのは確かに庭だからここは1階だ。ということ
はさっきまで居た部屋は地下ってこと？

このめちゃくちゃな状況に、私は頭を抱えて床にしゃがみこんだ。

おじさん登場

とそこへ。

「よくも起きたな。」

ピシッ

背筋が凍った。

え、誰？何事？！

「ここはあべこべの世界。なぜ来たんだ。」

そこには長身の痩せたおじさんが立っていた。

っていつか、なに言ってるのかさっぱり。言葉は怒っている感じなのに、顔はにこにこしてるよ。変なおじさんだな。

無視して外に出ようと玄関のドアノブを握ったその時

「そのドアは押すんだよ。」

おじさん、私の家なんだから知ってるよ。

少し苛つきながらそう思った。そしてドアを押した。

ミシッ

あれ？開かない。

「だから押すんだつてば。」

押してるんですけど。意味分らない。

ギギッ

あ、開いた。引くんじゃん。やだ、もう。

振り返るとすぐ近くにおじさんがいて後ずさりした。

、、ていうかおじさん笑ってるよ。ほんと、なんなんだ。

その前に不法侵入だろ。なに人の家で普通にしてるんだ。可笑しいだろ。

そういえばこのおじさん、どこかで見たことあるような気がする、、
、気のせいかな？

あべこべの世界とか言ってたな。あべこべってことは

ひっくりかえっていること

だよな、、、、

いまいちわからないと思った私は、とりあえず外に出た。

親子

外に出ると、辺りは青白く霧がかかっていて、気を失う直前に見た景色と同じだった。

朝の天気では今日は快晴だったのにやっぱり不思議な天気だなあ。

不思議なところといえば天気だけではなく、周りにある建物や電柱も歪んで見える。私、相当に熱があるんだろうな。

そこへ、前から親子が歩いてきた。

「お母さん、今日は良いお天気だね。」

「そうね。お洗濯日和だね。」

平凡な会話だ。

、、、、つて全然良いお天気なんかではないじゃないか。おじさんといい、言ってることがめちゃくちゃだ。

ん？そういえばさっきの、あべこべってのはやっぱりそのままの意味だったのかも。

ということとは、、、、

私はその親子に話しかけた。

「今日は暑いですね。」

「そうですね。風邪ひくようにね。」

やっぱり。今は12月で今日なんかすごく寒いもん。しかも、風邪ひくように、なんて明らかにおかしい。

更に私は聞いた。

「ここはどこですか?」

「ここは緑町だよ。お姉ちゃん、ここに住んでる人なんだ?」

?????

「まあね。ありがとう。」

さっきの疑問って結局どういう意味?

逆なんだから、

「ここに住んでいない人なんだ?」

ってことなのか。

訳すの地味にめんどくさいな。

緑町は私が住んでる場所だし家は1階と2階が入れ替わっているだけで確かに私の家だ。

けどここは私が知っている場所ではない。

あべこべの世界

という異世界に迷い込んでしまったみたい、、、。

再会？&コインタワー

あべこべの世界が私がいた世界と違うことは3つ。
辺り一面青白い霧に囲まれていること。

物事の意味が逆であること。

それと多分だけど、ど、

電柱が歪んでいること。

え。霧は普通にある？

いや、そういう霧ではなくてもっと怪しげな。

って誰と話してるんだ？

今声が聞こえたような。

私が周りを見渡すといつの間にかよく知っている人がすぐ側にいた。

「知佳！！」

そこにはさっきまで一緒に学校にいた知佳が立っていた。

「あれ？知佳もこの世界に迷い込んだの？そっぴえは家に送
つてくれたのは知佳？ありがとう。」

「千尋さま。私は貴方とお会いするのはこれが初めてでございます。」

ど、ど、ど、？

知佳がおかしくなっちゃった。私が親友を見間違えるわけがないし。

でも知佳はものすごく敬語が苦手だ。

敬語というか日本語というか言葉が苦手なんだ。

どんなに和風美人でも話す言葉は的外れなものばかりだ。面白いつちゃ面白いんだけど。

とにかく、只今発展途中！！

でも目の前にいるのは確かに知佳だ。

私が知佳についてあれこれ考えていると、

「確かに私の名前は知佳と申します。失礼ながら急いでおりますので説明は後で、まず私についてきてもらえませんか？」

「え？ああ、はい。」

私はこの知佳に調子が狂う思いがしたがとりあえず返事をした。

「ねえ。敬語じゃなくて普通に話してよ。」

「それは出来ません。千尋さまは大切な“救世主”なのですから。」

き、救世主！？

ますますわけがわからなくなつた。

知佳は歩きだした。

「ちょっと待って。ここはかつこよく瞬間移動じゃないの？」

「そんな技術はありません。すぐそこですので歩いて行きましょう。」

「

なんだ。めちゃくちゃな世界だから何でもありなのかと思った。そういえば今の会話、至って普通だったよね。さっきの親子と話した時にはあべこべだったのに。

んー、わけがわからない。

私が混乱していると前を歩いていた知佳が振り向いて言った。

「あれが私たちの本拠地、コインタワーでございます。」知佳が指差す方向には屋根が巨大なコインでできた名前そのままの少しさびれた塔がそびえ立っていた。

わー。霧で全く見えなかった。ここはただの空き地で、こんな建物なかったはずなのに。

「それでは千尋さま。こちらへ。」

私はコインに興味をそそられ知佳に聞いてみた。が、

「それは後で説明します。さあ。」

この世界のことよりも救世主のことよりも目の前のコインに惹かれていたが、ここは我慢だ。

私は知佳について、塔の中に入っていった。

タワーの中

塔の中は意外と明るく、周りの壁には太陽と、、多くの人々が刻まれていた。ある人々は互いに向かい合っで見つめ合っていた。また、ある人々は地面をじつと見つめていた。

これは一体なんなのだろう。

私はしばらくの間、その刻まれた絵に見入っていた。そして、上の者を呼んできますと行ってしまった知佳が男の人を連れて戻ってきた。

「あつー！」

さつき私の家に不法侵入したおじさんだ。というより私の学校の教師の酒井先生だ。どうしてさつき思い出さなかったんだろう。

「酒井先生！！どうしてここに！？」

「千尋さま。今ご説明いたしますのでこちらの部屋にどうぞ。」

先生まで“千尋さま”って、、なんなの、ほんと。

私は言われるまま部屋に入っていた。

そこは小さな部屋で、私たち3人ともう1人入ったら定員オーバーなくらいだった。

「もう少し広い部屋はなかったの？」

「申し訳ありません。この塔内はこのサイズのお部屋があるだけなのです。」

「あ、そうなの。」

まったく。知佳と話してるのに変な感じだ。

「私は酒井と申します。このコイントワーはこの世界を中枢で維持する役目をしていて、私はここの番人をしています。」

「はあ、、、。」

「千尋さま。私は先ほど申しあげましたが、知佳でございます。ここで酒井さんの補佐役を任されています。」

「へえ、、、、。」

「ちなみに私はもうお気づきのようですが、千尋さまの世界では高校の教師をしています。」

「えっ！？私の世界を知ってるの？ってか本人っていう可能性も期待してたんだけど。」

「私は、いや、私たちは千尋さまがいう本人でもあり、まったく違うとも言えるのです。」

「どつゆつじとっ？」

酒井さんはこの世界のことを説明し始めた。

世界の謎

私たちは千尋さまの世界の“影”として存在しています。

はるか昔、影は意志を持ち合わせて存在していました。

影は本来、主人の人間と共にあるもので、いわば一心同体。例えば人間で他人に影を踏まれて良い気分がする人はいないでしょう。影はその感情を受け止め、主人を信頼して共に生きていくのです。

それが5千年前、強大な意志を持つ影をつくる人間が生まれたのです。

その影は自身が世界の主導者になるべく、影が周りの暗さに隠れてしまつ夜、自分の意志で人間から離れていったのです。

その行為は以前まではあり得ることのないことでした。しかし、影と人間が互いに想い合わず相反する意志を持って過ごし続けていると影は自身の意志を塊にして人間から離れることが可能になったのです。

それは影がなくなったのではなく影の意志だけが離れていったということです。

その影がこの世界をつくったのです。やがて他の影も同じように意志だけ移動してきました。

塊になった意志は実際には見えません。ただ結界を抜けてこの世界にくるとその塊は主人だった人間の姿になって存在することになるのです。

それぞれが国を創り、生活を始めました。簡単に言えば人間の世界

と影の世界と言えるのですが今から千年前、影にある変化が起きたのです。

世界の謎（後書き）

毎回短い更新ですみません。特に今回みたいな説明の文章は難しくて全然進みません。（-_-;）こんなペースのまま続けますがお付き合いただけたら、と思います。

影の世界の異変

初めて影が人間から離れてから時を経て、影も変化しました。影は意志に関係なく人間が生まれてすぐに離れるようになったのです。

しかも影は主人の人間の感情が離れていても伝わってくるようになりました。生まれてすぐ離れても、共に生きていたのです。

主人が成長する中で苦しめば影も苦しみます。それは私たちにとっても不思議なことに、突然苦しくなったり悲しくなったり嬉しくなったりするのです。

そして影は主人の内面で性格が変わります。例えば穏やかに見える人でも内に熱い想いを秘めているような主人を持つ影は何にでも熱い性格です。

しかし職業や付き合う人が違うのでそれによっても性格は左右されます。あくまで基本的にはということなのです。

影にも人の良い者がいればそうでない者もいます。しかしそのような者も主人の感情や影自身の行いで善良になるものなのです。

さて、ここで今この世界で起きていることを説明します。

1000年前、この世界にやってきた影は明らかに他の影にはない邪悪というにふさわしい者でした。その影はこう言いました。

「なぜ影が人間から離れてまで自分たちの世界を創ったと思っているのだ。それは人間よりも優位に立つためだ。それなのになぜこの世界の人々は人間世界を征服しようとしないのだ。この世界こそが

表の世界なのに。」

その日からその影は自身を“絶対指導者”と呼び、人間世界を征服することを目的にまずこの世界の統一を図りました。絶対指導者は非常なまでに人間を憎んでおり、人間のすることなすこと全てを否定しています。そこから“あべこべ”はきているのです。

全国民は言葉を覚える時点で人間の感覚の逆の言葉を教わるのです。例えばそうですね、、、千尋さま、あなた様にとってはこの部屋は“暖かい”ですよ。しかし私たちはこの感覚を“涼しい”と覚えるのです。

絶対指導者の考えに熱心に賛同する者もいれば、争いごとを好まない性格ゆえに反対する者も当然います。

その絶対指導者はいよいよ人間世界を侵略しようとしているのです。今はそのために人間世界を影の姿で偵察している段階です。

そこで反絶対指導者主義の私たちはなんとか主人の人間世界を守りたいと活動しているのです。

そのために千尋さまが必要なので多少強引にお連れしたしだいなのです。

ここで酒井さんの話はいったん終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1687z/>

もう1つの世界

2012年1月4日11時45分発行